探究的な学習の在り方に関する研究推進地域

連携中学校区：大崎上島町立大崎上島中学校区

連携地域を構成する学校

学校名	学級数	児童生徒数
大崎上島中学校	5	92
大崎小学校	8	118
東野小学校	5	38
木江小学校	5	27

（R5.12.1現在で記入）

１　研究の概要

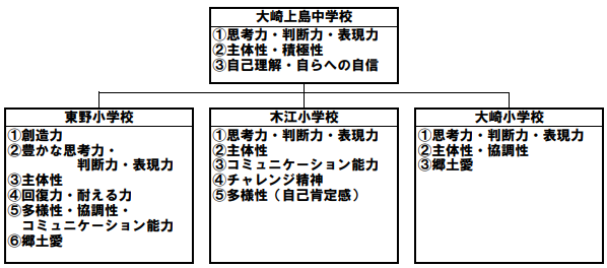
（１）研究テーマ及び研究のねらい

大崎上島中学校区では幼小中連携プロジェクトを推進し、「大崎上島学」を基盤とした学びを展開している。「大崎上島学」とは、単に自分のふるさとを知るだけでなく、大崎上島の自然、伝統・文化、産業や暮らしを児童生徒が探究することで、自らを見つめ直し、自分の生き方を考えることにつなげようとする学習のことである。地域のすばらしさに気付かせ、地域に誇りに思う心や、地域の発展に貢献する態度を育てることを目標にしている。生活科や総合的な学習の時間も「大崎上島学」の目標達成の一役を担い、各学年で「大崎上島学」のテーマを設定し、系統的な幼小中のつながりのある学習を推進している。しかし、各学年で学習のテーマがある程度設定されているということは、教員が教材研究を怠れば、毎年同じような学習内容がくり返されるということになり、内容が形骸化してしまうという危険性もある。また、本中学校区の児童生徒は探究課題において、主体的に進んで活動を進めることやさらに学びを深めることに課題がある。そこで、研究テーマを『大崎上島を担う　たくましく生きぬく子供の育成～「大崎上島学」のさらなる充実を通して～』と設定した。「大崎上島学」を、ＰＢＬの考え方をもとに、形骸化させることなく、さらに発展・深化させていくことをねらいとしている。「大崎上島学」のさらなる充実によって、将来の大崎上島を担う児童生徒の資質・能力を向上させることが研究の大きなねらいである。

（２）資質・能力の設定について

大崎上島中学校区では、各学校の実態に応じて育てたい資質・能力を設定している。児童生徒の実態に応じて、どのような資質・能力の育成を目指していくのかを検討し続けていくことにしている。

大崎上島中学校区　育てたい資質・能力　系統図



大崎上島中学校では、「広島県の１５歳の生徒に身に付けておいてもらいたい力」や３小学校で育てたい資質・能力を踏まえたものとしている。

（３）取組について

３年間で次のことに取り組んだ。以下、「２　実践事例」、「３　研究の成果と課題等」でも適宜取り上げながら説明する。

① 小学校３校交流「K授業」の充実
② 中学校「探究学習シート」の活用
③ 「大崎上島学」アンケートの開発・実施
④ 探究過程の「ふり返り」の充実
⑤ 幼小中のつながりや児童生徒のこれまでの知識や経験を意識した単元構成
⑥ 教師も児童生徒も同じゴールイメージをもつための指導の充実

２　実践事例

【大崎上島中学校第１学年での実践事例】

中学校第１学年の「大崎上島学」では、島の文化施設や自然を体験する校外学習や、伝統文化である櫂伝馬体験、大崎上島の食文化学習、福祉体験学習等を例年行い、大崎上島のよさを中学生の視点から見つめ直すことを目標にしている。今年度は「2030年大崎上島SDGs達成プロジェクト！」と題して、金沢工業大学SDGs推進センター考案の「THE SDGsアクションカードゲーム『X（クロス）』」での構図を参考に単元構成を行った。具体的には、『2030年の大崎上島で起こりうる「トレードオフ」を大崎上島の「リソース」を活用して解決しよう！』というパフォーマンス課題（単元末課題）を設定した。トレードオフとは、何かを達成するためには何かを犠牲にしなければならない関係のことである。例えば、「都市開発が進んだ結果、森林破壊が問題となった。」「環境のためにエアコンを使わなかったら健康被害が出た。」など、SDGsの達成のためにはトレードオフが避けられない。リソース（資源、源という意）としては、カードゲーム「X」の中ではドローン、アニメ、人材交流、観光客、温泉、AI、お笑いなど多種多様なものがあり、大崎上島のリソースとしても様々なものがあると想定した。単元のスタートは小学校での「大崎上島学」のふり返りから始め、これまで学んできた大崎上島のモノ・人・魅力等がトレードオフを解決するためのリソースになりうることを確認した。そして、実際の活動の中で生徒たちは「リモートワーク」「ユニバーサルデザイン」「シェアサービス」「地産地消」といった一般的に考えられるリソースに加え、「大崎クールジェン」「みかんやレモンなどの特産品」「空家」「フェリー」「町民運動会」「地域の方々」「ベテランの農家の方の話」などの大崎上島ならではのリソースを考え、様々なトレードオフの解決策を考えた。2030年に解決すべきトレードオフとしてはどのようなことがあるのかについては、様々な体験活動を計画し、それを単元全体の「情報の収集」に位置付けることで発想を引き出そうとした。例年行っている体験学習に加え、「ものづくり体験」、次世代のエネルギーやカーボンニュートラルに関する「中国電力出前授業」を行った。食、エネルギー、福祉、伝統文化の継承、ものづくり・町づくりといった多種多様な体験活動から学んだことや感じたことをもとに生徒たちは解決すべきトレードオフを考えた。

本単元は大崎上島中学校で開発した「探究学習シート」をもとに学習を進めた。探究学習シートでは、プロジェクトにおける「評価項目」や「求められる成果物」、「スケジュール」等を記入し、生徒と教師が同じゴールイメージや見通しをもって、学習を進められるようにしている。特に、「評価項目」については、本単元育成しようとする資質・能力から設定している。やや生徒にとっては難しい表現となる「資質・能力」から、「評価項目」を改めて設定することで、生徒が毎時間の自己評価に取り組みやすくした。以下がその３点である。

①探究すること：プロジェクトの達成目標に向けて、よりよい方法を考え取り組むことができたか。【「思考力・判断力・表現力」に対応】
②自ら行動すること：失敗を恐れず行動・チャレンジし、その結果を次の活動に生かそうとすることができたか。【「主体性・積極性」に対応】
③自分を見つめること：自分の興味があることや得意なことを見つけたり、将来の自分や島の未来について考えたりすることができたか。【「自己理解・自らへの自信」に対応】

こうすることで、生徒が評価についてや、ゴールイメージを把握しやすくなるだけでなく、教師も単元の全体像を構想したり、他の教師と指導方針を共有したりしやすくなる利点がある。この自己評価についての工夫は小学校でも行っている。

【大崎小学校第１学年での実践事例】

小学校３校では、総合的な学習の時間や生活科の取組を交流する場として「K授業」を設定している。具体的には、各学年で３校共通のテーマを設定し、探究活動を行い、発表会を行っている。K授業へは学習でお世話になった方をゲストにお招きすることもある。各学年でK授業を毎年行っていく中で、共に学び合い、つながり、互いに高め合う集団へと成長していく。小学校３校の児童はやがて卒業し、大崎上島中学校でともに学ぶ仲間となる。K授業での学び高め合う集団づくりが中学生としてのスタート時に重要な意味を持ってくる。このK授業を進めていくための教員の取組として、大崎上島町小学校中学校教育研究会の学年部会がある。この会は定期的に開催され、「大崎上島学」の年間での見通しや具体的な活動の詳細を協議したり、近況を報告し合ったりしている。子ども同士がつながるためには、それ以上に教員どうしの密な連携が必要不可欠であり、「大崎上島学」を充実させていくための重要な会である。

小学校第１学年の「大崎上島学」では、生活科を中心に「校区の自然」をテーマに掲げて学びを展開している。大崎小学校の「あきをみつけて たのしもう」の単元ではまず、児童の意見から、「秋に見つけたものを使って、クイズ大会をしよう！」という課題を設定した。その後、「園児さんとも交流できないかな？」という教師の問いかけに対して、「クイズのレベルを変えないと面白くないって言われるよ。」「クイズだけじゃなくて、一緒に遊びたい。」という意見があがり、園児さんも楽しめるように「園児さんも招待して、『つくってあそぼう会』をひらこう！」というパフォーマンス課題を再設定することになった。地域の園児もその対象とすることでより探究的な学びとなることを期待した。大崎上島中学校区では、幼児教育と小学校教育との円滑な接続のための組織づくり、スタートカリキュラムの充実を図っている。園児にとっては小学校ではどんなことをしているのか学ぶ機会となること、児童にとっては相手意識がある中での深い学びが展開されることをねらった。本単元では、町内の１年生どうしによる第１回目K授業、そして、園児を招待しての「つくってあそぼう会」を行う第２回目のK授業を計画した。

計２回のK授業に向けて、まずは地域に出かけて秋を見付ける活動を行った。秋の生き物のひみつ（特徴・習性）や、「つくってあそぼう会」で使えそうな木の実を見付け、それを整理して、ゲームを作ったり、クイズを考えたりした。そして迎えた１回目のK授業では、他校の児童が作ったゲームの出来栄えの良さに驚いた様子の児童もいた。自分達ももっと良いものを作ろうとやる気になったり、作戦を変更したりするなどし、２回目のK授業に向けて、ゲームそのものやルールの説明の方法などを改めて考えた。自分たちで納得して、気持ちを切り替えて粘り強く取り組むこと姿があった。楽しませたい相手がいるからこそ、そして、１回目のK授業があったからこそ、活動に主体的に向かう姿があった。第２回目のK授業では、児童は小学生のお兄さん、お姉さんとして園児を楽しませようと会をリードしたり、自分たちが学んできたことを上手に伝えようとしたりする姿があった。秋の大崎上島の自然について探究し、そのよさを味わったり新たな発見をしたりしただけではなく、町内の同級生どうしのつながりや下級生とのつながりを深めたり、よりよいものを考え、作り出そうとする探究心を高めることができた。

３　研究の成果と課題等

（１）成果

令和４年度に、中学校区全体で「大崎上島学」の取組を進めているものの共通した指標がこれまでなかったことから、「大崎上島学」アンケートの開発を行った。このアンケートは「大崎上島学」への思いについてのセクション、「大崎上島学」への取り組み方についてのセクションの２部に分けた。令和５年度のアンケートにおいて、「①進んで学習したり、表現したりする力が身に付いた。」という質問、「②地域のためにできることを考えたり、地域のために行動したりすることができた。」という質問に対して、肯定的評価は小学校・中学校ともに８割から９割を占めた。さらに、「よくあてはまる」、「あてはまる」の回答の割合は次のようになった。

	①		②	
	よく あてはまる	あてはまる	よく あてはまる	あてはまる
小学校全	36.8%	56.4%	32.8%	51.3%
中学校全	40.5%	50.6%	41.8%	46.8%

主体性や表現力の伸長を児童生徒が実感し、そして、学びが地域への還元へとつながっていることが分かる。

また、令和５年度全国学力・学習状況調査の中学校質問紙調査「総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか？」という問いに対しての肯定的評価の結果は次のようになり、全国のポイントを大きく上回る結果となった。

全国	広島県	大崎上島中
72.6%	77.9%	80.8%

肯定的評価が８割を超える結果となり、探究の学びのサイクルが定着してきたことの表れであるといえる。

（２）課題や今後の改善方策等

今後取り組むべき課題の１つに小中連携の充実がある。小小連携はK授業等を通じて図られているものの、小中連携は十分ではない現状がある。それには２つの面があると考えている。１つの面が「児童生徒どうしのつながり」である。児童生徒が交流する場面が少ない現状がある。要因の１つとして、移動の難しさがある。中学校１つに対して小学校は３校あり、距離的にも離れている。ＩＣＴの活用が突破口にならないかと考えている。もう１つの面が「学習内容のつながり」である。小学校での学びが中学校でさらに深化しなければならないが、「大崎上島学」の中での課題設定が似通ったり、学びが断片的なものになったりしまっている印象がある。先に述べた中学校第１学年の「2030年大崎上島SDGs達成プロジェクト！」では、小学校での「大崎上島学」を振り返ることから始め、これまで学んできた大崎上島のモノ・人・魅力等が「トレードオフ」を解決するための「リソース」になりうることを確認し、学びの連続性をもたせた。これは「学習内容のつながり」をもたせるための１つのアプローチであった。小学校で何を学習しているのか、それを中学校ではどのように深化させているのか、教員間の連携も重要になると考えられる。